

ICUの教育的環境の調査研究

——他大学との比較——

植田 淳子

石塚 正一

原 一雄

はじめに

国際基督教大学（以下ICU）は、真理の探究と自由の高揚という学問的使命、人間存在のあらゆる次元において真理を追究するキリスト教的使命、ならびに国際的な相互理解と交流の実現を目指す国際的使命の3つの大きな使命を担って創立された大学である。しかし、今日我々の多くはこのICUの、そして延いては高等教育機関全体の存在価値というものにつきあまりにも無関心すぎるという反省に立たされている。どのような志を抱くものがどのような特徴をもつ大学に入学した場合に、初めて本人の持てる才能を十分にのばすことができ、また大学としても目指す教育と研究の実績をあげることができるのだろうか。大学が、教育機関としてその進歩改善をはかるためにまず第一に必要とする作業は、その教育環境を率直に見つめて、自己評価を行なうことであると考えられる。そこで本研究では、ICUの教育環境評価について在学生による意識調査を行ない、本学の特徴およびその社会に対して果たしている役割について関係者一同が考えるための資料を供したい。

目 的

大学環境の研究は、Koffka のゲシュタルト心理学、Lewin の場の理論、Murray の欲求—圧力理論などを基礎として1950年代の米国において生まれた。例えば、PaceとStern は、大学をとりまく文化を諸々の個人の欲求とそれに対応している環境の圧力との複合であると考え、College Charac-

teristics Index (CCI) を創案した。この CCI は、30 個の環境の特質を測定する評定尺度から構成されており、各々の評定尺度は Murray (1938) の欲求—圧力理論の概念から導かれた Activities Index (AI) に含まれる 30 の性格欲求評定尺度に相応するものとして考案された。つまり、Murray が個人の様々なパーソナリティを我々の欲求とそれに対する圧力との関係から捉えようとしたのと同じように、大学の性格もまたその環境圧力と、そこにおける学生の様々な欲求との関連において調べる必要があると考えたのである。しかし、その後の研究から、CCI に含まれる多くの環境圧力評定尺度は、性格欲求評定尺度と相応するものではないこと、すなわち、有機体としての環境はいろいろな面において、様々な性格をもつ個人の集団が作り出す構成とは異なっていることが分った (Pace, 1969)。そこで Pace は、大学の環境を構成するいろいろな変数は、個人的性格の要因と考えられる心理的内容ではなく、そこで機能している教育的内容によって定義されるべきものであるという仮説をたて、この考えに基いて CCI に因子分析による検討を加え、College & University Environmental Scale (CUES) を開発した (Pace, 1969)。従って CUES は、大学間の知的、文化的、そして社会的雰囲気の違いを明確にうち出すものと考えられる。それは大学生活について設けられた 5 領域、すなわち、実用性、学究性、共同性、妥当性、意識性の各々につき各 30 項目、計 150 項目の質問項目から構成されている。各々の構成内容は以下の通りである。

A 実用性 (Practicality) —— 個人的地位や実利などが強調される程度。

B 学究性 (Scholarship) —— 学問的意欲、知的関心などが強調される程度。

C 共同性 (Community) —— 共同体としての意識や実体が存在する程度。

D 妥当性 (Propriety) —— 礼儀正しさや、思慮深い行動が評価される程度。

E 意識性 (Awareness) —— 自己の探求, 政治的関心, 創造的・芸術的関心が強調される程度。

さて我が国においては, PaceのCUESを基にした100項目よりなる日本語版CUESが立教大学において作成され, 1972年から1980年に至るまで7回にわたり継続的に実施されてきた(内藤, 1981)。その他, この日本語版CUESを用いた研究は, 関西学院大学と北星学園(土橋, 1979)でも行なわれている。またこれとは別に, ICUにおいても同じPaceのCUESを基に4段階評定尺度を備えたJapanese University Educational Environmental Scale (JUEES)が作成され, 1976年9月, 在学生1335名によるICUの教育環境に対する評価の測定が行なわれた(原ら, 1980; 牧野, 1978; 松村, 1978; 村山, 1978; 島田, 1978)。このJUEESでは, 日本の諸大学の教育環境を評価するため, 次のような手続きの下で質問紙が作成された。まず, CUESに含まれる全質問項目を日本語に翻訳し, 次にアメリカと日本の大学における文化的差異を勘案して意味が不明確ないしは回答が困難であろうと予想される項目を削除し, その結果, 5領域, 各15項目, 計75項目を選び出したのである。なお, 回答の形式に評定尺度を用いた点が, 原版および日本語改訂版と大きく相違する点である。

本研究においては, 他大学との比較を容易にするため, あえてJUEESを使用せず, 先に述べた日本語版CUESを用いてICUの教育環境の特徴を調べることを目的とする。なお本学の特徴は, 他大学の調査結果との比較を通してより一層明らかになると考えられるので, 立教大学, 関西学院大学, および北星学園大学で行なわれた最近の調査結果と, 今回ICUにおいて実施された調査の結果とを対照させながら, 本学の個性をうきぼりにさせていきたい。

方 法

1. 調査対象 1983年度国際基督教大学教養学部在学生305名を対象とした。

2. 調査用紙 PaceのCUESをもとに立教大学において日本人大学生用に改訂された日本語版CUESは、大学生活に関する5領域、各20項目の計100項目よりなり各領域に属する項目は下記のように配置されている。

領 域	項目番号
A. 実用性	1～10, 51～60
B. 学究性	11～20, 61～70
C. 共同性	21～30, 71～80
D. 妥当性	31～40, 81～90
E. 意識性	41～50, 91～100

回答方法には「はい」「いいえ」の二肢選択法が用いられた。

3. 調査方法 1983年5月中旬から下旬にかけてランダムに抽出した学生へメッセージボックスを通じて調査への協力を依頼し、回収箱を設けて調査用紙の回収を行なった。

4. 整理方法

1) 領域別集計

各項目とも意味内容を考慮して有効なものを得点1とし（叙述が否定的な場合には、「いいえ」と回答することが意味内容においては肯定となる）、5領域別に20点満点で被調査者それぞれの得点を算出し、その後全被調査者の領域別平均得点および標準偏差を求めた。なお大学間の比較は、他の3大学については1979年度の資料を基にして、領域毎の平均得点により行なった。

2) 項目別集計

各項目に対する肯定回答および否定回答の百分率を求め、他大学の結果と比較した。

結 果

1. 回収率

前記の方法で回収を行なった結果、総配布数829の内、回収数305、回収

率は36.8%であった。

2. 領域別集計結果

各領域における得点の度数分布を示すと、図1のようになる。またそれぞれの領域の全被調査者群の平均、および標準偏差は、表1に示される。大学別の各領域における平均得点は、図2に示される通りである。なお大学別に各領域の平均得点の順位を示すと表2のようになる。

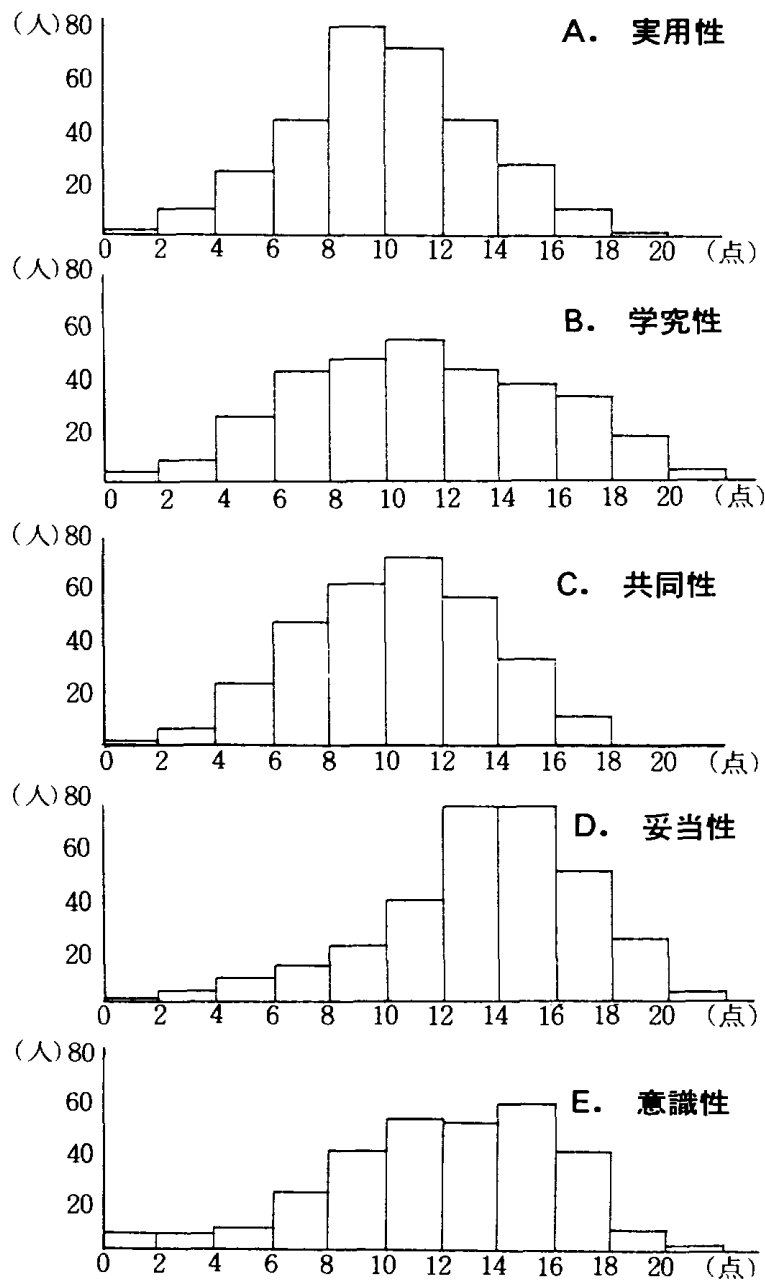


図1 領域別得点の度数分布

表 1 各領域における平均および標準偏差

領 域	平 均	標準偏差
A. 実 用 性	9.52	3.31
B. 学 究 性	10.76	4.40
C. 共 同 性	9.83	3.28
D. 妥 当 性	12.93	3.64
E. 意 識 性	11.61	3.88

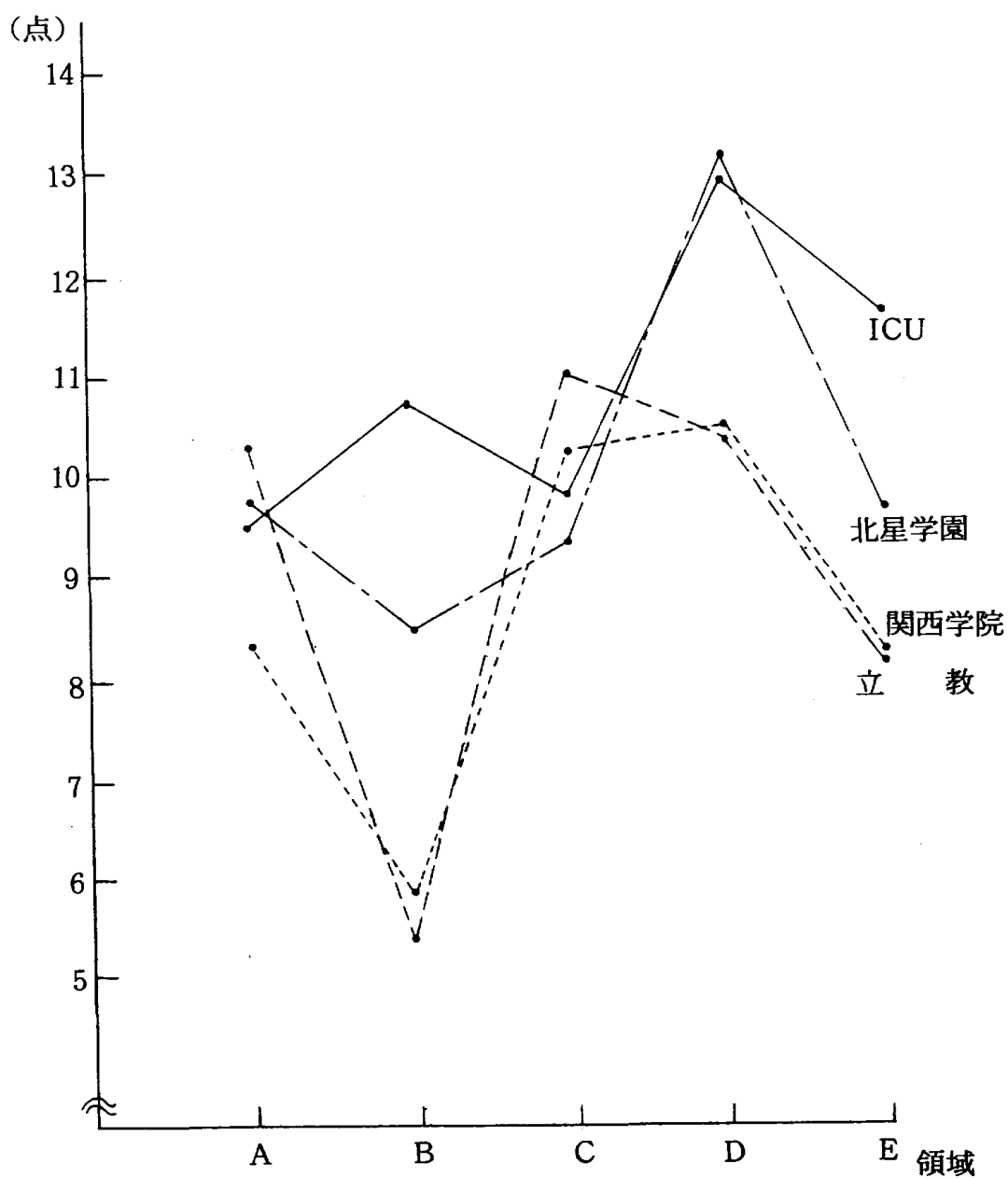


図 2 領域別平均得点の大学間での比較

表 2 各大学における領域順位と平均

大学 \ 順位	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位
I C U	D 12.93	E 11.61	B 10.76	C 9.83	A 9.52
北 星 学 園	D 13.16	A 9.78	E 9.72	C 9.36	B 8.50
立 教	D 10.50	C 10.26	A 8.32	E 8.26	B 5.88
関 西 学 院	C 11.00	D 10.40	A 10.30	E 8.20	B 5.40
1964 年 ミネソタ大学 (参考)	E 17.22	B 16.72	C 13.80	A 12.06	D 10.80

3. 項目別集計結果

各項目の肯定回答の百分率を他の 3 大学と比較できるように並べて示すと表 3 のようになる。

表3 項目別集計結果の大学間での比較

領域	項番 目号	質 問 項 目	「はい」回答数 (%)			
			立教	関学	北星	ICU
A	1	学内の出来事については、すぐ知ることができる。	43.8	39.0	52.0	36.4
	2	学内は、標識や方向案内図等によってわかり易くなっている。	26.7	49.9	57.1	43.6
	3	学内は、この大学独特の雰囲気が濃い。	76.0	84.0	55.4	94.8
	4	無難なクラブやグループにいる方が、社会的に受け入れられる。	63.4	72.5	49.7	46.6
	5	この大学は、より実用的・現実的教育をする傾向がある。	16.5	28.6	49.1	26.6
	6	成績優秀な学生には、特別に勉学奨励の機会が与えられる。	41.0	55.2	70.9	64.6
	7	学生は、リーダーシップ養成の機会に恵まれている。	26.7	26.8	32.6	28.9
	8	この大学は、学生が不満を申し立て易いようになっている。	20.1	39.0	48.6	17.7
	9	学内環境は、大学にふさわしく美しく便利に整っている。	46.8	86.9	34.9	78.0
	10	大学は、学生の能力や個性を生かす機会を与えている。	46.3	39.9	48.0	59.7
	51	コンパやダンスパーティー等の社交の機会が沢山ある。	74.4	72.3	61.7	42.0
	52	新しい流行や流行語が、たえず学生の間ではやっている。	83.7	75.2	61.7	33.4
	53	多くのカリキュラムでは、具体的で実地的なものよりも、抽象的なものに重きがおかれている。	64.7	63.4	49.7	50.5
	54	多くの学生は自分の尊敬する人物のようになろうとする。	25.1	26.2	33.1	23.9
	55	この大学では、実用的コースが設けられている。	46.0	37.7	52.6	46.2
	56	学生の代表は、公に認められた手続きにのっとって選挙されている。	25.3	73.2	84.6	35.1
	57	学生は、自分達の計画、立案したことを最後まで責任をもってやりとげるよう教育されている。	30.0	39.2	53.7	50.8
	58	学生に対して、病気予防のために、保健指導が徹底している。	47.4	42.8	44.0	34.4

領域	項番 目号	質 問 項 目	「はい」回答数(%)			
			立教	関学	北星	ICU
A	59	キャンパスでは、多くの有名人が招かれ講演会・音楽会・学生討論会が開かれている。	27.5	43.0	10.9	63.6
	60	この大学には、特別な資料や立派な設備がある。	31.1	62.5	24.6	75.0
B	11	学生の勉強意欲をかり立てるような教授方法を工夫し実行している教師は少ない。	77.1	86.0	49.7	59.7
	12	一生懸命に勉強しなくてもたいていの科目は簡単にパスできる。	56.5	55.0	33.1	31.8
	13	学生は、授業中さされるまではすすんで発言しない。	92.6	95.6	86.3	52.8
	14	教科書だけ勉強しておけば、ほとんどの試験に間に合う。	56.2	69.2	46.9	32.1
	15	学生は目標を高くおき、それに向かって努力している。	9.6	7.5	21.1	36.1
	16	教授は、学生の能力を十分ひき出している。	7.4	3.5	17.7	13.4
	17	学生の間では、真剣な知的レベルの高い討論がよく行われている。	12.4	8.6	23.4	30.5
	18	学問のきびしさを教える教師は少ない。	75.2	83.1	65.1	65.9
	19	誰でも、単位をとり易い科目と、とりにくい科目を知っている。	84.0	87.1	72.0	55.1
	20	多くの教授は、積極的に研究にたずさわっている。	67.5	59.4	71.4	67.5
	61	教師の研究室をたずねて、議論をしたり、質問したりする学生が多い。	14.3	14.0	22.3	42.3
	62	ほとんどの科目では、持続的な勉強や予習が必要である。	36.1	36.1	60.0	64.9
	63	知的レベルの高い授業が多い。	49.0	49.0	49.1	54.8
	64	学生は勤勉であり、確固たる勉学目標をもっている。	5.8	9.5	23.4	48.2
	65	この大学は、純粋な学問や基礎研究の面ですぐれている。	52.6	52.3	49.7	59.3
	66	この大学では、入学すれば卒業は簡単である。	63.9	55.4	28.6	20.7
	67	この大学では、大学院に進学する者が少ない。	79.1	81.4	89.7	12.8

領域	項番 目号	質 問 項 目	「はい」回答数 (%)			
			立教	関学	北星	ICU
B	68	ほとんどの学生は、授業でノートをきちんととろうとする。	32.5	20.8	55.4	72.8
	69	よい成績をとろうと努力する学生が多い。	73.0	68.7	65.1	89.5
	70	多くの学生は、自分の専攻を決めるにあたって、はっきりした目的を持っている。	18.2	29.0	53.1	45.9
C	21	学内には、うわべだけの表面的なつきあいが多い。	62.8	68.1	50.9	51.5
	22	学生は、バー、喫茶店や友人の部屋で時間をすごすことが多い。	80.4	78.0	50.3	29.5
	23	学生は、気軽によく貸し借りをする。	87.9	87.4	83.4	79.0
	24	学生は、困った時はお互いに助け合う。	83.7	86.0	87.4	85.2
	25	多くの人は、自分の周囲の人に対して思いやりがある。	60.6	64.3	73.1	77.4
	26	多くの上級生は、新入生が学園生活にとけこめるよう積極的に手助けをしている。	60.3	52.3	65.1	38.7
	27	この学校は、非常に親しみやすいという評判である。	63.4	67.2	58.3	24.9
	28	麻雀をすとか、映画を見に行くとかいうことで、仲間はすぐ集まる。	84.8	84.0	73.1	43.6
	29	大学の行事に、多くの学生は積極的に協力する。	5.8	20.4	28.6	13.1
	30	自治会選挙に無関心な人が多い。	91.7	99.1	94.3	92.1
	71	大学祭には、学内の雰囲気盛り上がる。	8.0	60.1	60.0	10.5
	72	学生主催の行事や講演は、みんなの話題になる。	22.6	45.2	40.0	29.8
	73	学内では、仲間意識が高い。	69.7	69.0	73.7	61.3
	74	ほとんどの教授は、学生の個人的な問題に興味がない。	74.4	81.4	62.9	50.8
	75	お互いによく知り合えるような機会が多くある。	39.7	32.6	41.1	46.2
	76	教職員に対して、学生は親近感を持っている。	22.6	17.5	49.1	60.5

領域	項番 目号	質 問 項 目	「はい」回答数 (%)			
			立教	関学	北星	ICU
C	77	多くの学生は、卒業してからも何らかの形で、大学とつながりを持ちたいと思っている。	63.1	57.4	41.7	59.7
	78	クラブ活動は、大学にとって必要不可欠なものである。	75.8	74.7	68.6	76.1
	79	この大学の社会的評判はとても気になる。	74.7	81.8	71.4	62.6
	80	この大学の個性を誰もが感じている。	55.9	69.0	57.1	89.5
D	31	学生団体は、社会のルールは勿論、大学の規則に従って活動している。	70.8	69.4	83.4	81.0
	32	学生が泥酔したり、乱暴したりするようなことはめったにない。	57.6	72.9	80.6	78.7
	33	いつも何かの役に立とうと思っている人は、やっかい者と思われる。	26.4	21.5	18.9	15.1
	34	学生は、大学の所有物を良心的に扱う。	37.5	43.9	60.0	70.2
	35	学生の出版物が個人攻撃をしたり、特定の団体の名誉を傷つけるようなことはしない。	40.5	48.1	79.4	78.4
	36	学生の規則違反は、普通黙認されている。	56.2	66.5	32.0	51.8
	37	この大学では、目上の人に尊敬を払うべきだと思っている人が多い。	49.0	50.3	37.7	21.6
	38	学生は、音楽会や講演会で騒いだり身を入れて聞かないことがある。	38.8	39.0	40.0	17.7
	39	すべての学生は、大学に対して現住所を常にあきらかにしている。	83.2	86.3	81.7	79.7
	40	学生は、団体生活において、自分の健康管理を行っている。	68.6	67.4	72.0	66.9
	81	学生は、団体として行動する場合は、大学に届けている。	66.1	59.2	68.0	64.6
	82	学生は、自由奔放な態度で教授を戸惑わせている。	20.1	23.7	26.3	12.1
	83	学生は、時々とっぴな行動をしたり反抗したりする。	40.5	31.5	24.6	20.7
	84	学生は、規則などあまり気にかけていない。	68.3	69.4	61.1	54.4
	85	学内で、学生のはめをはずした行動は考えられない。	50.7	65.6	66.3	54.1

領域	項番 目号	質 問 項 目	「はい」回答数 (%)			
			立教	関学	北星	ICU
D	86	多くの学生は、自分を他人に合わせるより、他人が自分に合わせることを望んでいる。	42.4	37.0	41.7	41.3
	87	学生は、規則や慣例にないことをする時には、必ず相談したり許可を求めたりする。	41.3	43.9	56.6	43.3
	88	授業の途中で出入りする学生は少ない。	11.0	21.7	36.0	37.4
	89	学内の多くの人は、他人への思いやりが少ない。	40.2	40.6	30.9	20.7
	90	時間通りに授業をはじめる教師は少ない。	84.6	82.3	40.6	23.0
E	41	学内ですぐれた科学者が来て講演しても聴衆は少ないだろう。	62.8	31.7	55.4	23.3
	42	大部分の学生は異なった考え方や事柄をかなり冷静に客観的に判断している。	64.5	64.3	68.0	74.1
	43	学内のあちこちで議論している人達がいる。	15.7	16.0	25.1	34.1
	44	ここでは、自己の視野を広げるような機会はめったにない。	39.9	25.9	40.6	18.4
	45	学生の演劇、音楽、絵画等に対する関心は高い。	68.9	73.4	42.3	79.0
	46	学内で、すぐれた評論家が来て講演しても聴衆は少ないだろう。	48.2	25.3	44.6	17.0
	47	学生は、国内外の情勢に大いに関心を持っている。	33.6	46.1	38.3	59.3
	48	進歩的文化人の発言には、かなり関心がある。	58.1	68.3	62.9	71.1
	49	教授の中には、様々な話題の人物がいる。	68.0	72.7	76.0	76.4
	50	学内の人々は、困難にぶつかることによって成長していくようだ。骨が折れれば折れる程一生懸命にやる。	35.5	34.1	49.7	52.5
	91	学生はお互いの行動をかなり厳しく批判しあっている。	15.4	10.4	27.4	22.0
	92	現代の社会的・政治的生活において、ほとんどの学生が自己のとるべき役割について強い意識と責任を感じている。	7.7	13.3	34.3	21.6

領域	項番号	質 問 項 目	「はい」回答数 (%)			
			立教	関学	北星	ICU
E	93	学内においては、お互いの道德感・価値感の違いを認め合おうとしている。	52.3	53.7	54.9	76.4
	94	学生は、自分の個性に気が付いている。	57.9	63.0	64.6	67.2
	95	自主的な集会やデモがよく行なわれる。	28.1	5.5	36.6	3.9
	96	学内に哲学者や神学者がきて講演しても、聴衆は少ないだろう。	77.7	62.1	62.3	44.6
	97	学生の世界平和に対する関心は高い。	27.3	31.9	48.0	63.3
	98	この大学で、はばの広い考え方を持っている教師が多い。	46.0	41.2	68.0	62.0
	99	授業内容とは関係なく、すすんでクラス討論をさせる教師が多い。	3.0	7.8	13.1	26.2
	100	休暇を利用して見聞を広めようとする学生が多い。	74.9	75.6	55.4	81.0

考 察

まず各領域毎に本学の特徴について考察をすすめていきたい。

A. 実用性

表1および図2から明らかなように、この領域の平均得点は本学においては5領域中最低であり、4大学間での比較においても関学、北星に次ぎ第3位の成績である。この“実用性”の得点の低さは、項目番号1の学内の出来事についてはすぐ知ることができる(36.4%、以下()内の数値は、肯定回答の百分率を示す)、8. この大学は、学生が不満を申し立て易いようになっている(17.7%)等の回答状況からみて、大学側と学生側との間のコミュニケーションがうまくいかない点に、その原因があると考えられる。これに対して、9. 学内環境は、大学にふさわしく美しく便利に整っている(78.0%)、60. この大学には、特別な資料や立派な設備がある(75.0%)

等の回答にみられるように、本学の自然環境およびその設備のよさは大多数の学生の認めるところであり、これが本学の特長となっていることは他大学の回答との比較からも明らかである。それだけに広大な敷地と緑に恵まれ、学術研究の為の資料や設備が整っている現在のICUの教育環境を今後も維持し保存していくことは、これからの我々の大きな責任であるといえよう。

B. 学究性

表1から明らかなように、この領域は本学においては“妥当性”、“意識性”に次ぎ第3位の得点であるが、4大学の比較においては2位の北星を大きく引き離し第1位である事が図2からわかる。一般に日本の大学では、純粋に学問の探求を目的とする学生は数が少ないが、本学においては入学後も学問への意欲、関心を持ち続け、積極的に勉学に励む学生の多いことが調査結果から明らかである。これは、本学の量より質を重んじる教育方針に基く少人数制教育が功を奏したものであるといえよう。

C. 共同性

同じく表1および図2をみると、本学の学生にとってこの領域は“実用性”に似て比較的得点の低い領域であり、4大学間での比較においても他とあまり差がない。この“共同性”の低さの最大の原因は、ICUにおける学生会の不在に起因すると考えられる。29. 大学の行事に多くの学生は積極的に協力する(13.1%), 71. 大学祭には学内の雰囲気盛り上がる(10.5%), 72. 学生主催の行事や講演はみんなの話題になる(29.8%)等の回答は、各種の行事や活動がクラブや学生有志の手に委ねられている現在のICUにおいて、その団体に属していない学生がそれらに無関心になったり非協力的であったりする実情を端的に示していると思われる。学生ひとりひとりが、このICUという共同体の構成メンバーであることの自覚を高め、もっと積極的に各種学生団体の活動に参加してもらいたいものである。

D. 妥当性

この領域は、本学においては5領域中最も得点の高い領域であり、また他大学との比較においても北星に次ぎ得点の高いことが図2からわかる。また

各項目に対する回答状況をみても、肯定的な回答をしている学生の多いことが表3より明らかである。しかし、このように本学において“妥当性”が最も得点の高い領域であるからといってそれに甘んずるわけにはいかないであろう。なぜなら、ここでの設問はすべて共同生活を営んでいく上で我々にどうしても必要となってくる節度や規律に関するものであり、本来ならばすべての項目において高い肯定的な回答が期待されて然るべき領域である。従って、37. この大学では目上の人に尊敬を払うべきだと思っている人が多い（21.6%）、88. 授業の途中で出入りする学生は少ない（37.4%）等に対する回答率は、大学生としてはむしろ恥ずべき結果であると思われる。当然我々が守らなければならない最低のルールおよびマナーに関する設問で構成されているこの“妥当性”の領域では、すべての項目で一層高い率の肯定的回答が得られるようにしていきたいものである。

E. 意識性

この領域は本学においては“妥当性”に次ぎ得点の高い領域であり、4大学間での比較においては2位の北星を大きく引き離して第1位の成績であることが表1および図2から明らかである。41. 学内ですぐれた科学者が来て講演しても聴衆は少ないだろう（23.3%）、44. ここでは、自己の視野を広げるような機会はめったにない（18.4%）、45. 学内で、すぐれた評論家が来て講演しても聴衆は少ないだろう（17.0%）等への回答の仕方は、ICU生の知的関心度の高さを示唆するものである。そしてこの知的関心度の高さには、本学においてその教育計画の一環として行なわれているコンボケーションの貢献するところが大きいものと思われる。ところでこの“意識性”の領域において、否定的な回答の高さで目立つ項目に92. 現代の社会的・政治的生活において、ほとんどの学生が自己のとるべき役割について強い意識と責任を感じている（21.6%）、95. 自主的な集会やデモがよく行なわれる（3.9%）があるが、この結果から今後の我々に必要なのは、自己の興味の範囲内だけに止まらず、広く社会全体を見つめることのできる目を養い、社会に対して積極的に働きかけ、貢献しようという姿勢をもつことだといえ

よう。

以上、領域別に考察を進めてきたが、調査結果全体を通していえることは、本学は他大学に比べて全体的に得点の高いこと、特に「学究性」と「意識性」の高さは4大学中群を抜いており、これが本学の特長となっていることであろう。なお図2および表2から、本学は北星学園とはその教育環境評価において共通性が認められるが、「共同性」が高く「学究性」の極端に低い立教大学や関西学院とはややタイプを異にした大学といえる。

さて、最後に非常に古い資料ではあるが表2に挙げたミネソタ大学での結果は、ICUの教育環境をより広い視点から検討するための貴重な資料のひとつであるといえる。本学の調査結果と比較してまず第一に気づくことは、各領域におけるミネソタ大学の得点の高さである。特に「意識性」、「学究性」の評定は驚くほど高く、本学の関係者は今回の調査結果に満足することなく、少なくともミネソタ大学の数字を到達可能な目標として、よりよき環境づくりに励んでいきたいものである。次に領域別の順位に着目すると、「妥当性」の領域を除き、本学とミネソタ大学の教育環境評価パターンは非常によく似ていることがわかる。本学の調査結果が、他の日本の3大学よりもむしろミネソタ大学での調査結果と似ていることは、本学の特性を示していて興味深い。

以上をもって、ICUの教育環境調査の結果についての報告を終わるが、今後もこの調査が継続的に行なわれ、また他大学の教育環境との比較研究などがますます多くの協力者の手によってなされることを切に望む。

参考文献

- 土橋信男 「大学の教育的環境の継続的研究—1977年から1979年における北星学園大学の教育環境について—」『北星論集』1979, 17, 115—153
- 原一雄・牧野文恵・松村治子・村山興子・島田博美「国際基督教大学における教育環境調査の試み」『教育研究』1980, 23, 112—127

牧野文恵・松村治子・村山興子・島田博美「教育環境調査」国際基督教大学
教養学部学士論文，1978

Murray.H.A. Explorations in Personality. New York: Oxford Univ.
Press, 1938

内藤 武 「大学環境調査（キューズ）とは」『立教大学時報』1981，84－
92

Pace.C.R. College and University Environmental Scale. Princeton, N.J.
:Educational Testing Service, 1969

**A SURVEY OF THE EDUCATIONAL
ENVIRONMENT OF ICU:
A COMPARISON WITH THE CAMPUS ATMOSPHERES
OF OTHER UNIVERSITIES**

Junko Ueda
Masakazu Ishizuka
Kazuo Hara

The purpose of this study is to survey the educational environment of ICU in order to clarify its characteristic atmosphere through a comparison with the campus atmospheres of other universities. The questionnaire employed for this aim is a revised translation of the "College and University Environmental Scale" (Pace, 1969), which consists of 100 statements concerning various aspects of college life, i.e. campus features and facilities, campus rules and regulations, students' life and extracurricular activities, all of which help to specify the intellectual-cultural-social climate of a particular campus.

Scores obtained from the "CUES" provide an overall measure of the college environment along following five dimensions developed by factor analyses; (a) *Practicality*, (b) *Scholarship*, (c) *Community*, (d) *Propriety* and (e) *Awareness*.

The questionnaires were distributed to 829 Japanese students randomly selected from 1800 undergraduates in the College of Liberal Arts, and a total of 305 responses (about 37%) were finally collected. Main points clarified through this research are as follows:

- (1) *Propriety* is the most highly evaluated dimension at ICU, followed by *Awareness* and then *Scholarship*. *Community* and *Practicality*

are the lowest in their evaluation.

- (2) The scores for *Scholarship* and *Awareness* obtained for ICU are much higher than for any other universities.
- (3) The evaluations of ICU students' are similar to that of Hokusei Gakuen University students, but they differ slightly from that of Rikkyo or Kansei Gakuin University students.
- (4) Only ICU students have something in common with the students of Minesota University in their evaluation of the educational environment.